

トルコにおけるシネマトグラフの伝来と映画製作の黎明 —シネマトグラフの世界的浸透 (その5) —

永 治 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

I オスマン帝国におけるシネマトグラフの伝来

東洋の風光を愛したフランスの海軍士官ピエール・ロティは、紀行『世紀末のコンスタンチノーブル』で三たび訪れたトルコの印象をつぎのように綴っている。

1890年5月14日水曜。今朝フランス大使館において黄色の薔薇で飾られた大食卓のまわりに、私たち招待客が少なくとも30人参集した。すべて旅行者なのである！

かつては黒海を渡ることが、私たちに怖がらせていた。しかし、二年前から新たな鉄道がトプカピ宮殿の麓まで通じ、驚くことにヨーロッパの全域から押し寄せた閑人の群れが、到るところを見物して廻っている。⁽¹⁾

オスマン帝国の近代化と開放政策は、ヨーロッパの歴史的転換を決定的にした1789年に始まる。奇しくもこの年かねてフランスに関心を抱くセリム三世が、首都イスタンブールのトプカピ宮殿で即位した。ロシアやオーストリアの外圧に抗して皇帝は、洋式軍隊と士官学校を創設し、行政・財政の改革にも着手する。以後セリム三世の廃位や数次の政変にもかかわらず、トルコの社会改革は徐やかに進み、1839年の『ギュルハネ勅書』によって生命・名誉・財産の保障、租税と兵役の法定化などが定められた。⁽²⁾

この勅書を起点としていわゆるタンズマート改革が展開され、土豪化した地方の中央集権、イスラム教徒と非イスラム教徒の法的平等、ヨーロッパの技術と資本の導入、エリート養成と教育制度の確立が促進された。なかでも1868年フランスの協力によって設立されたガラタサイ高等学校ではフランス語で授業が行われ、西欧的教養を持つ政治家、官僚、知識人が多数巣立った。1870年頃には小説家シムセチン・サムや戯曲家ナムク・ケマルによる近代文学、シナーシーやアリ・パシャの自由思想も花開く。イズミール、サムスン、トラブゾンなどの港にはさまざまな国旗を掲げたヨーロッパの商船が停泊し、銀行、鉱山、鉄道などの基幹産業が外資系企業によって開発される。1874年

ヨーロッパ初の地下鉄が新市街の船着場カラコイからグラン・リュ・ド・ペラまで敷設され、10年後にはパリ、ウィーン、イスタンブールを結ぶオリエント急行も完成した。⁽³⁾

1895年春から学術的な集会で数次の成功を収めたルイ・リュミエールは、同年10月アカデミー会員ジュール・カルパンティエにシネマトグラフ25台の製造を依頼した。その後2ヵ月のうちに欧米の各地から照会が殺到し、受注台数は200を超えた。⁽⁴⁾

オリエント急行の終点シルケジ駅にスタジオを構えるテオドール・ヴォフィアデスはイスタンブールの高名な写真家であった。彼は映画の将来をいち早く予見し、新製品を購入すべくリヨンへ書翰を送った。しかし、1896年1月に至ってもカルパンティエ製作のシネマトグラフは4台にすぎず、これを発注した全員がリュミエール社から発売の無期延期を通告された。⁽⁵⁾

トルコに初めてシネマトグラフを導入したのは、リュミエール映写技師団の幹部、アレクサンドル・プロミオである。1896年8月ヴェネツィアで史上最初の移動式カメラを試みた彼は、ロシアやアメリカにおける撮影を経て、翌年の2月からトルコに滞在した。⁽⁶⁾プロミオの回想『旅日記』にはこの地における体験と活動が手短かに書かれている。

トルコの旅行についてはほとんど話すことがない。撮影機を持ち込むため、極度の苦難に曝されただけである。その時代のトルコはアブデュル＝ハミト二世の治下にあり、クランクを備えた器械はすべて嫌疑をかけられた。入国を許可されるには、フランス大使館の調停が必要とされ、係官には幾ばくかの貨幣を握らせた。こうしてやっと私はコンスタンチノーブル、イズミール、ヤッファ、イェルサレムで撮影することができた。⁽⁷⁾

リュミエール社の作品カタログにはプロミオがイスタンブールで製作した作品としてつぎの五つが記載されている。①トルコ歩兵隊の行進 (作品414号)、②トルコ砲兵隊の縦列 (作品415号)、③金角湾のパノラマ (作品416号)、④ボスポラス両岸のパノラマ (作品416号)。これらの作品のうち①は1897年4月にリヨンで、

③と④は同年8月同じくリヨンで上映された。なお、プロミオは当時オスマン帝国の版図であったイスラエルやシリアへも撮影に赴いている。⁽⁸⁾

プロミオが回顧したとおり、1890年代のトルコはセリム三世以来の近代化政策が屈折し、独裁的な政権のもとに喘いでいた。1876年に即位したアブデュル＝ハミト二世が当初は革新的な姿勢を示し、憲法の制定と議会の開設を実現する。しかし、政府高官の汚職や外国資本への屈従が糾弾されると、皇帝の大権によって憲法を停止し、議会も閉鎖する。こうして近代ヨーロッパの思想と文化が次第に浸透するトルコで、自由主義者の言論・出版や少数民族の独立運動が抑圧される。とりわけ1896年には陸軍軍医学校学生を中心とするいわゆる青年トルコ党、〈統一と進歩委員会〉と名づけられた秘密結社が、諜報機関に察知されて大弾圧を受けた。⁽⁹⁾プロミオがイスタンブールに到着したのは、このような厳戒体制のさなかである。

新しいものすべてに強い猜疑心を向けるアブデュル＝ハミト二世は、シネマトグラフの導入をもきわめて警戒した。とはいえ、皇帝は己れの権勢を誇示するため写真を活用し、第一級の写真家を宮廷専属として登用していた。彼らはガラスケースに陳列するよう皇帝の肖像を撮り、また国内各地の景観を写真にして外国の使節に提供した。⁽¹⁰⁾イスタンブールに滞在するプロミオは、スペイン王宮での折衝と同じように、帝国陸軍の撮影許可を受ける代償として、ユルディス宮でシネマトグラフを披露したと推測できる。

プロミオに続いてリュミエール映写技師団のフランシス・ドゥブリエ、シャルル・モワッソン、ペリゴもロシア巡業の際にトルコに立ち寄った。⁽¹¹⁾ブロードウェイで合衆国におけるシネマトグラフ初公開を敢行したフェリックス・メスギッシュが、イスタンブールを訪れたのは1903年2月と思われる。これに先行する数年のうちにフランスの映画産業は複雑な様相を帯び、リュミエール社の経営方針にも重大な変化が生じていた。

1897年5月シャンゼリゼ慈善バサールの映写会場で火災が発生し、この大惨事が映画の製作と興行を苦境に追い込んだ。エディソンとの争闘に敗れたルイ・リュミエールは、アメリカ合衆国からの撤退を余儀なくされる。1897年末から彼は映画製作を停止し、映写器具の販売、光学装置〈フォトラマ〉の考案、さらには天然色写真の開発に主要な関心を移した。他方シネマトグラフの発明を契機に設立されたパテ兄弟商会が、映画興行の領域で地歩を固め、独創的なトリックを駆使するジョルジュ・メリエスが幻想的な映像で人気を博す。リュミエール社と袂別したメスギッシュは、その後も各地で撮影を続け、1900年にはイゾラ兄弟の采配のもとにオリンピック劇場でメリエスの作品も上映した。⁽¹²⁾中近東へ旅立った機縁については、彼の著書『世

界映写旅行—映像の狩人の回想』を参照したい。

1901年1月イゾラ兄弟の諒解のもとに私は、ヴィクトリア女王の葬儀が挙行されるロンドンに出発した。葬列が通るハイド・パーク大理石門の脇に拠点を確保し、2台の器械、リュミエールとミログラフをあらかじめ充電する手筈にした。

その地点に身を置くやいなや、1897年ニューヨークで知り会ったシャルル・アーバン氏が、驚くことには向側から近づいてくる。同行している映写技師が、私にカメラを見せた。偶然同じ位置を選びましたね、とアーバン氏は言った。

もっぱらドキュメンタリーや絵画的映像を製作する企業として、ロンドンでは彼の経営によるアーバン貿易会社がウォーヴィック貿易会社と双壁をなしていた。みずからの発明の開発をリュミエール兄弟が放棄して以来、パリの製作会社は〈屋外〉を忘れ、写実的なものにほとんど関心を向けなかった。

今後撮影するフィルムをヨーロッパとアメリカで配給させてほしい、と即座にアーバンは私に契約を申し入れた。彼の提案はさらに拡がる。会社の名義で各地に旅行してほしい、と言うのである。「プロのカメラマンに相応しい壮大な企画を用意しています、」と彼は確言した。「フランス、スイス、イタリア、スペインを撮影し、典型となるような映像集成を作ってください。そして、つぎにはご希望どおりにトルコやエジプト、さらにはロシアやコーカサスまでもあなたを派遣しましょう。』⁽¹³⁾

こうしてアーバン貿易会社の支援によってメスギッシュはまずブルターニュとプロバンスを旅し、1902年のクリスマスはジュラ山脈の麓で、1903年のカーニバルはニースの海辺で迎える。さらにスペインのブルゴスやグラナダ、イタリアのヴェネチアやポンペイを歴訪した彼は、やがてマルセイユ発の客船で一路オスマン帝国に向かった。⁽¹⁴⁾

さあ、ここがコンスタンチノーブルだ。到着地点の壮観さはこれまで再三描写されてきた。オリエントの天空を仰ぐ。魅力的な海辺の光景を人類の労苦が絢爛たるものにしてている。整然と配置された家々が重なり合って、丘陵の神殿にまで拡がる。七つの塔の城、かつてキリスト教徒のものであった聖ソフィア寺院のビザンチン式円蓋、巨大な穹窿と六つの突塔を擁するスルタン・アフメッド・モスク。鐘の音と祈禱時報官の声が、信者の群れに響きわたる。

絶大な支配力を象徴するかのように、至高の宗教的權威を祀る神殿が高地に築かれている。

港湾はあらゆる大きさの船舶、蒸気船や帆船、大形のはしけや櫂で漕ぐ舟で雑踏し、先へ進めな

いほどであった。これこそ壮大なジオラマであり、転変する光景を逐一私は凝視した。

そのあと税関の内部に入り、荷物の陸揚げを待った。意外に愛想のよい検査官が事務室に私を招き入れ、コーヒーを出してくれた。彼はトルコ帽を被ってフランス語を話し、一時保管した手元のカメラに強い興味を示した。〔中略〕

長年の経験で鍛えた巧妙さで、最後に彼は肖像を刻んだフランス貨幣へ話題を導き、私に呟いた。「あなたの国には沢山の金貨があるのに、トルコは貧しいかぎりです。」フランスの貨幣がオスマン帝国では珍重される、とここで感じ取った。

荷物すべての持込み許可を求めていた私は、時間を節約し、手続きを簡単にするため、彼の誘導を受けざるをえなかった。こちらを甘く見た彼は、20ルイ出せないか、と密かに促す。10ルイだけ差し出すと、これを懐に収めながらはっきりと言った。「フランス人が好きだから、ご希望どおりに計いましょう。」⁽¹⁵⁾

旅装を解いてメスギッシュはホテルの個室から眺める古都の景観に感激し、それとは対照的な街路の不潔と喧騒に気分を悪くする。まずフランス大使館に赴いて撮影許可の手続きを通辞に依頼する必要があった。ついで彼は有名なモスクやバザールを見て廻り、新市街ペラの坂道やガラタ大橋を逍遙する。とくに印象に残ったのは、荷物を運ぶラクダの群れや顔面を隠した遠慮勝ちな女性たちであった。⁽¹⁶⁾

大使館専属の通辞に伴われ、ボスポラス海峡を縦断することになった。アジア側の海岸スクタリで櫂で漕ぐ細長い舟に乗り込む。

それはデルウィーシュ〔イスラム教の托鉢僧〕の日であった。

コンスタンチノーブルに滞在している間に、彼らをフィルムに収めたいと私は願っていた。支障が生ずることも心配したが、状況は突然好転した。みずからの宗教的な行為、西洋の公衆にはまったく目新しい行為がシネマトグラフで撮影されても、デルウィーシュには不愉快でないと言う。

彼らの礼拝は普通モスクのなかで行われるが、そこは私の仕事には暗すぎるので、中庭で見せてもらった。デルウィーシュも世俗的な才覚を備えており、こうした好意を得るために、多額の寄進を施した、と敢えて誌しておく。

雉鳩が宿る大きないちじくの木蔭で、みそぎの受水盤を脇にして祈禱のための絨毯が地上に拡げられた。

信者がモスクから出てきた。頭部をスカーフで覆って、まえに進む。私たちの俄か〈俳優〉は典礼のため濃褐色のフェルト製小球帽を被り、無数の髷で飾られた長く広い貫頭衣を纏っていた。

こうした舞踏僧はモザイク模様の中庭中央で不動の姿勢を保つ。風格のある予言者風の導師が彼らの真中で『コーラン』の章句を朗唱する。

うづくまったデルウィーシュは大声を発し、小太鼓を叩き、しゃがれ声で聖なる連禱を繰り返す。

さらに彼らは柔軟な動作で肩と肩を合わせ、拍子を取って身震いを始めた。小太鼓がこうした振動を増幅して、朗唱は早いテンポとなり、寛衣はふくらむ。そして、「ラ、イッラー、アッラー」の合唱は次第に混然とした急速調となり、やがて耳を聳するばかりの乱舞に至る。小太鼓の響きが幻覚を強め、彼らの乱舞をさらに激しくする。創造者の言葉に従って「進展する世界の讃歌を捧げ」るこれらデルウィーシュは、歌い手の荒々しい大声に牽かれる独楽にすぎない。

クランクを手で廻し、マガジンのなかでリールを回転させながら、私はこの熱狂的な踊りのリズムを追っていた。

ついで突然すべてが停止し、「ラ、イッラー、アッラー」の合唱が弱まって消えた。デルウィーシュは神秘主義の発現に打ち砕かれ、次々と崩れ伏した。⁽¹⁷⁾

メスギッシュによって撮影されたオスマン帝国の映像を、残念ながら私たちは見る事ができない。しかし、『世界映写旅行』に書き誌された精細な描写は、二十世紀初頭のトルコを知る貴重な史料のひとつである。小説や演劇を模倣した映画製作を批判し、ドキュメンタリーにシネマトグラフの真価を認めるメスギッシュは、当初から念願したトルコ皇帝の撮影を断行した。⁽¹⁸⁾

水曜日。この日は皇帝アブデュル＝ハミト二世が礼拝堂での儀式に臨席し、祈禱を行う。

やはり通辞に伴われ、私はユルドゥス宮の門前に待った。

鹵簿が通過し、その間近衛兵が整列を崩さない。騎馬隊のトランペットが鳴り響くや、豪華な正門が開かれて槍騎兵が現れ、徐やかに騎馬を進めながら、皇帝の供廻りを周到に統率する。

礼装で飾り立てた将官と閣僚、外国の大使、宮廷の貴顕が皇帝の鹵簿を構成する。

正午になる。物音ひとつない静寂さなかで、祈禱時報官の朗々たる声が祈りを誘ない始める。「ラ、イッラー、アッラー」。

これに応じて他の祈禱時報官が突塔から突塔へ朗唱を交す。ハミディエ寺院の朗唱がもっとも晴朗たる響きとして知られ、オスマン帝国全体がこれに和音を合わせていく。

まさしくこの瞬間に侍従を伴って皇帝が聖所に入る。

半時間のち彼が首相と語らいながら寺院の階段

を降りてくる。胸元に手を挙げて参列者に会釈し、儀装馬車に乗り込む一瞬、真正面から私は皇帝を撮影した。⁽¹⁹⁾

アーバンとの協約によってメスギッシュが映写旅行を再開した1902年、パリに亡命した〈統一と進歩委員会〉が第一回青年トルコ人会議を催し、専制政治の打倒と憲法・議会の復活を要求した。この改革運動はバルカン半島に駐屯する野戦軍団にも浸透し、1908年春からマケドニアの各地で青年将校を主体とした蜂起が頻発する。ついに同年7月アブデュル＝ハミト二世は反乱の鎮圧を断念し、立憲制の再興を宣言した。⁽²⁰⁾

トルコの映画史家ブルカク・エヴレンは、首相官房に保存される古文書のなかに1908年に発せられた禁令を見出した。⁽²¹⁾外国人に対してトルコでの撮影をしばしば禁止したアブデュル＝ハミト二世が、マケドニアの反乱に直面して、どれほど危機感を募らせたかを、この史料は如実に語っている。

ユルディス宮 1908年6月20日

オスマン帝国首相官房

当局に寄せられた情報によれば、ふたりのフランス人が海上交通本部による正規の運航とは別に、船舶第18号に乗り込めるよう策動している。彼らはシネマトグラフなる器械を傍らに置いて航行し、公衆に見せると称して、ボスポラス海峡の兩岸、プリンス諸島、バキルコイ、イズミットなどの撮影を企図している。これを忌まわしき行為とみなし、恐れ多くも皇帝は禁止の指示と勅令を発せられた。⁽²²⁾

II トルコにおける映画興行と映画製作の黎明

トルコにおけるシネマトグラフ一般公開は、1897年シムント・ワインベルグによって初めて実現された。ユダヤ系ポーランド人に属し、ルーマニアの国籍を有する彼は、イスタンブール新市街の風情ある坂道、ユクセクカルム通りで写真材料の販売を営んだ。その後業務を拡げて、新市街ペラのグラン・リュ467番地（現在のイクスチラル通り）に移転し、パテ兄弟商会など外国企業数社の代理人となった。やがて彼はパテ製作の映画をビヤホール、スポネック亭で公衆に披露する。⁽²³⁾シネマトグラフ初公開の会場となったスポネック亭も、新市街ペラの中心に位置し、正面には名門校ガラタサライの堂宇が眺められた。アガー・オズギュックの著作『トルコ初期映画史』にはトルコ語とフランス語で併記されたスポネック亭のポスターが収録されている。

スポネック亭
ガラタサライ正面
1 階
活 動 写 真

実物大の動く映像
全パ리를席卷した
驚異的・感動的スペクタクル
コンスタンチノーブル初公開
毎夕上映
5時半、6時半、8時半、9時半
マチネー：日曜および金曜⁽²⁴⁾

スポネック亭における初公開のあとワインベルグは、グラン・リュのコンコルディア会館（現在は聖アントワーヌ・デパドゥエの敷地）で上映を重ね、人気の高まりにつれて金角湾対岸のカフェ、フェヴジエに拠点を移した。フェヴジエは断食の季節に行われる影絵の公演で知られていた。まもなくイスタンブールにカンボンと名乗るリュミエール社の代理人が現われ、ガラタサライ近くのヴァリエテ劇場で映画を見せ始める。このフランス人は映写機の性能とフィルムで優位に立ち、トルコ語の説明も付加して公衆の心を捉えた。パテ兄弟商会の代理人ワインベルグはむしろ宮廷や貴顕の歓心を求めたとされる。こうして早くも1897年からトルコ映画興行の角逐が展開される。侍従長アメット・イゼット・パーサの邸宅でワインベルグが映写会を開いた際には、器械の故障によってフィルムに引火し、屋敷全体を焼尽する惨事となった。⁽²⁵⁾

この時期には映画がオスマン帝国の伝統的な芸能、影絵や舞踊や曲芸の副えものにすぎなかった。会場の狭さと設備の貧弱さに加えて、宗教的・道徳的な見地から映画が破廉恥で罪深いものとされたからである。立憲制の再興が実現した1908年、五大陸での制覇をめざすパテ兄弟商会は新市街ペラに直営映画館を設置し、その管理をワインベルグに委託した。パテの支援に応じて彼はフランス語、ドイツ語、ギリシャ語、アルメニア語などによる趣意書を作成し、トルコのさまざまな地域で映画館新設のため奔走する。⁽²⁶⁾こうしたワインベルグの尽力と当時の映画興行についてはエヴレンの叙述が精彩を放っている。

ながく封じられてきた自由が、1908年以降は社会生活においても開き始め、女性を映画館に誘うようになった。あるところでは女性のために特別の上映が組まれ、ほかのところでは二階を婦人席、一階を紳士席に定めた。夏には屋外の映画会場にカーテンを吊し、男性専用と女性専用に区分した。この間にワインベルグは貴顕の邸宅やさまざまな学校で特別の上映を実施し、映写機の販売をフィルムの賃貸も行った。ある学校ではひとりの若い職員が映画に情熱を抱き始め、フィルムの選定や映写機の操作を引き受けた。彼は映写技師の仕事について徹底的に学びたいと願い、粘り強い努力によってワインベルグの門弟にも助手にもなった。そして、ついには師匠の後釜に座り、トルコ映画の先駆者のひとりとして仰がれる。彼こそフ

アット・ウズクナイであって、1914年にはセデン兄弟と提携してひとつの映画館を開設する。⁽²⁷⁾

トルコにおける自主的な映画製作も早くは二十世紀の初頭から始まった。先頭を切ったのはオスマン帝国の領土マケドニアに住むギリシア系の兄弟ヤナキ・マナキとミルトス・マナキである。⁽²⁸⁾マナキ兄弟の業績はギリシア映画史の源流としても高く評価され、ミシェル・デモプロス編『ギリシャ映画』には詳細な論述が含まれる。

重要な事件をフィルムに収めるマナキ兄弟（なかでもミルトス）の撮影が行われたのは、ピンドス山脈の麓のモナステル（現在のピトーラ）かテッサロニーキにおいてである。『皇帝メフメト五世のテッサロニーキ＝モナステル行幸』（1911年）、『オスマン政権に反抗したマケドニア人の絞首刑』（1907年）、さらにトルコ青年の革命運動に関するいくつかの映像（1908年）。現実の事件を撮影したこれらの作品とともに、マナキ兄弟は日常生活の記録を遺した。『糸を紡ぐ女たち』（1906年）、『ピンドス山脈の麓の村』（おそらく出身地のアヴテラ）、『グレヴナの縁日』（1908年）、『ピンテ村小学校の開校式』（1906年）、『ワラキアの結婚』（1906年）など、彼らの撮影はむしろドキュメンタリーに属する。⁽²⁹⁾

写真家および映写技師としてマナキ兄弟は生前から住民の間で名高く、マケドニア映画資料館に詳しい文書が保存されている。現存するフィルム『皇帝メフメト五世のテッサロニーキ＝モナステル行幸』は、1990年と1995年にトルコ共和国においても上映された。⁽³⁰⁾

立憲制を再興したトルコではアブデュル＝ハミト二世が退位し、〈統一と進歩委員会〉の指導者が政治の実権を握った。この間に民族の独立や領土の帰属をめぐるバルカンの戦乱が繰り返され、ついに1914年ドイツ＝オーストリアの同盟国として第一次大戦に突入する。開戦に際して〈統一と進歩委員会〉はヨーロッパ近代への傾倒を転換し、オスマン帝国のナショナリズムとイスラム教徒の聖戦を強調した。⁽³¹⁾

ワインベルグのもとで映写技術を修得したウズクナイは、企業家セデン兄弟と提携して1914年イスタンブールに常設映画館を開いた。第一次世界大戦の勃発によって首都での興行も困難な時期を迎え、ウズクナイ自身も将校として出征した。ナショナリズムと排外主義が昂まるなかで、同年11月14日イスタンブール近郊の海浜にあるアナステファノス像が爆破された。この立像はトルコへの進攻を記念して、1878年にロシア人が建立したものである。戦意高揚のため軍部はこれを映像化しようウズクナイに依頼し、『ロシアによって建立されたアヤストファノス像の倒壊』が製作されたと言われる。従来の通説ではこの作品がトルコ映画の嚆矢とされ、スチール写真も遺されている。しかし、

最近の研究成果を踏まえるエヴレンは、1914年における『アヤストファノス像の倒壊』の完成には懐疑的である。⁽³²⁾

戦時の使節としてドイツを訪ねた軍務大臣エンヴェル・パーシャは、同国陸軍のシネマ部局を視察し、映画の効力を痛感した。帰国して彼はオスマン帝国陸軍に映画センターを付設し、所長にはワインベルグ、副所長にはウズクナイを任命する。こうしてトルコ最初の映画製作所が1915年から発足し、軍部の要人や前線での戦闘を撮影した。ここで製作されるフィルムはほとんどが短いドキュメンタリーであったが、ワインベルグは国立オッペレッタ劇場の経営者、アルザック・ベンリヤンとの連携を図り、外国の脚本を下地にした劇映画も企画した。しかし、1916年トルコとルーマニアの国際関係が緊張し、彼は敵国の国籍を持つとして所長の地位を追われる。その後任に昇進したウズクナイは、ワインベルグの立案を受け継いで、モリエールの戯曲の翻案『紳士ヒメットの結婚』を1918年に完成した。⁽³³⁾

1918年オスマン帝国は連合国に降伏し、戦争を推進した〈統一と進歩委員会〉の幹部は国外に亡命した。イスタンブールなど枢要な地域がイギリス、フランス、イタリアによって占領され、トルコの宮廷と政府は列強の傀儡となった。大戦中に着手され、占領下で完成された映画『家庭女教師』（監督アメット・ヘヒム）は、フランスを侮辱する内容を含むとして検閲を受け、公開を禁止される。1919年イギリスに支援されたギリシャ軍が侵攻し、翌年強要されたセーヴル条約の結果、トルコは事実上解体する運命に曝された。ムスタファ＝ケマル＝パシャに率いられる民族解放運動は、外国勢力と傀儡政権と対決し、各地でギリシャ軍や反革命軍を撃破してトルコ共和国を成立させた。1924年新たに憲法のもとで帝制が廃止され、大統領と議会による共和制度、近代的な刑法と市民法が確立する。こうして裁判所と公教育の非宗教化、一夫多妻制の禁止、国語のローマ字化が実現され、学問・芸術の発展にもかかってない好条件が造り出された。⁽³⁴⁾

解放戦争の砲火が轟く1922年、ケマル兄弟とシャキル・ケマルは新たなプロダクションを設立し、ここを拠点としてトルコ映画を代表する監督、ムーシン・エルトゥールルが精力的な活動を開始した。1892年イスタンブールで出生したエルトゥールルは16歳で初舞台を経験し、パリのカルティエ・ラタンに留学して演劇を学んだ。帰国後三人の同志とエルトゥールル劇団を結成し、フランス人アンリ・ベルトランの戯曲等を公演して注目される。その後1916年から1921年までのベルリン滞在中、ふたつのドイツ映画に出演し、『黒いチューリップの祝宴』など三つのフィルムも撮影した。トルコにおける彼の第一作は、1923年ケマル映画製作所の委嘱によって着手した『イスタンブールの愛の悲

劇——シシャリの美女ネディへの悲劇的殺害』である。実際に起きた事件に基づいて、この映画は社交界で有名な女性が愛人によって殺される、という激情的なドラマになっている。また、同じ年製作された『火のシャツ』では、アリデ・エディプ・アドヴァルの現代小説を脚色し、初めて祖国解放運動を主題とした。⁽³⁵⁾トルコの映画史家ジオヴァンニ・スコグナミロはエルトゥールルの功績をつぎのように評価している。

1923年から1942年までの10年間にムーシン・エルトゥールルは20あまりの長編とふたつの短編を製作した。1923年にトルコ共和国の宣言が発せられるが、その1920年代を通して彼の名前はまさにトルコ映画の同意語であった。当時のプロダクションはまだ脆弱であり、長編と短編を合計しても作られたのは30本ほどであった。草創期の映画界における彼の君臨は、1928年から1938年にかけてさらに頂点を極める。この10年間にただ一作、『太陽に向かって』(1937年)を例外として、世に出たすべての映画作品に彼の名前が刻印されていた。なお、すでに散失した『太陽に向かって』は若き詩人ナズン・ヒクメット・ランによって演出され、後年彼はトルコ現代詩の精華として世界的な名声を与えられる。〔中略〕

トルコの映画製作を独占し、若い才能の開花を妨げた、とエルトゥールルを非難する人々も存在する。また、彼は神から倥倥を授けられた人物であって、その時代にはフォルムの製作・配給が採算の合わぬ事業とされ、撮影のための施設や強固なプロダクションや映画館すら欠乏していた、と評されることもある。実際1930年代の初めにはトルコ最大の都会イスタンブールに十数個の映画館しかなかった。⁽³⁶⁾

1925年にエルトゥールルはモスクワを訪れ、滞在中にふたつの映画を製作した。また、ソヴィエトの演劇・映画について研鑽を重ね、エイゼンシュタインやドフキンから大いに啓発されたと言う。トルコ最初のトーキー『イスタンブールの街路』もエルトゥールル自身のシナリオによって1931年に完成した。このミュージカル映画にはエジプトの女優アージェ・エミールとギリシャの俳優ペリクレス・カブリリデスも出演し、国際的な共同製作として興行的に大成功を取めた。ついでトルコ国軍とアタチュルク大統領の後援によって、祖国解放運動を描いた力作『国民は目覚める』を世に送る。さらに1934年ギリシャとの共同企画『豆売商人ホウホル』が第2回ヴェネチア・ビエンナーレ映画祭で受賞し、トルコ映画が初めて国際的な檜舞台で称賛を得た。ヴォードヴィルやメロドラマも数多く手掛けたエルトゥールルは、1935年に詩人ランの脚本による『沼沢地の娘アイゼル』を仕上げる。この作品は田園のメロドラマを初めて映画化し、主役を演じ

たカヒーデ・ソングがとくに注目を集めた。⁽³⁷⁾

1933年『ひとつは言葉、ひとつは貴族』でデビューしたソングはエルトゥールルの作品に数多く出演し、西洋的な美貌と多彩な演技でトルコ最高の女優と評価されるに至った。⁽³⁸⁾メハメット・バストゥ編『トルコ映画』には彼女の卓越性を讃えるいくつかの論述が見出される。

初期のトルコ映画において理想とされる女性的な拳措と資質を、カヒーデ・ソングは完璧なまでに体現した。彼女はブスピー・バークレイの音楽喜劇『妻が欺くならば』(1930年)では可憐な少女であり、スタンバーグ＝ディートリッヒによる『嘆きの天使』を連想させる『悦楽の犠牲』(1940)では宿命の女に変わり、さらに『祖国、ナムーク・ケマル』では若い愛国者となり、後年『お茶と同情』を思わせる『好ましき歌』では上流社会の熟年女性を演じた。同時代のスター、すなわち美の女王であったフェリハ・テヴヒック、ダリユルベグイの女神ベディハ・ムバヒット、個性的な魅力を持つネヴィン・セヴァルなども、ソングの多様なレパートリーの一面しか演ずることができなかった。⁽³⁹⁾

共和国憲法による一夫多妻の禁止に続いて、1934年婦人参政権が認められ、翌年の総選挙では17名の女性議員が選出された。教育の普及ともあいまって女性が教師、弁護士、医師、作家などの知的職業にめざましく進出する。⁽⁴⁰⁾しかし、そのような女性像がスクリーンに現れることは稀であり、婦人による映画製作は思いも寄らぬことであった。『沼沢地の娘アイゼル』の封切から14年のちソングは独自のプロダクションを設立し、脚本・監督・主役を兼務して『祖国、ナムーク・ケマル』を完成させた。1951年に公開されたこの映画は主人公のありかたをめぐって、激しい賛否両論を巻き起した。前近代的な抑圧と差別が当然とされる環境のなかで、因習や偏見に抵抗し、政治参加を決意する女性が描かれたからである。⁽⁴¹⁾こうしてトルコ映画における最高の女優であったソングは、最初的女性監督としてさらに苦難と栄光の道を進む。

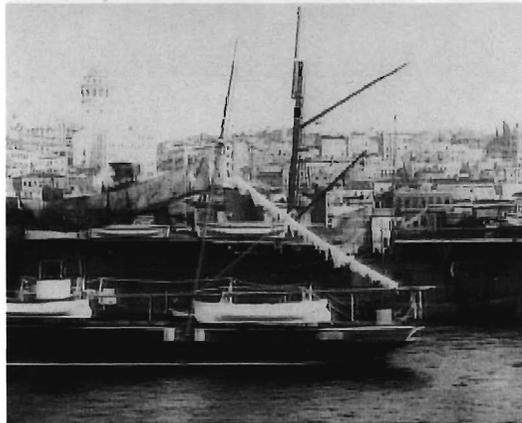
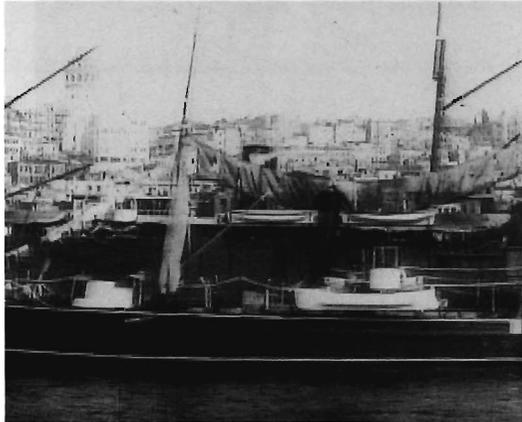
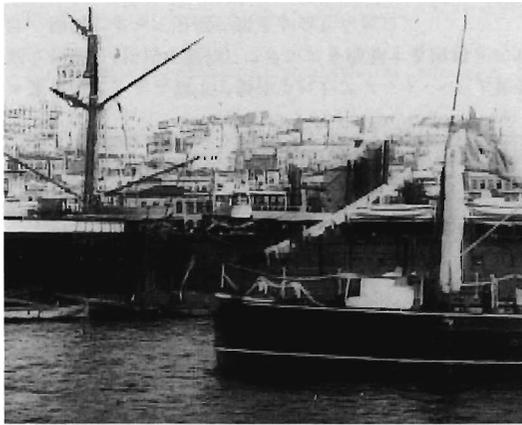
【註】

筆者が参照した主要な書物は、本稿において下記の略号で示される。(略号の大文字は著者名の頭文字を、小文字は書名の頭文字を示す。)

- Ch : G-Nichel COISSAC, *Histoire du cinématographe*, Paris, Cinéopse et Gautier Villars, 1925.
 Bet : Mehmet BASUTCU, *Le Cinéma turc*, Paris. Centre Georges Pompidou, 1996.
 Mt : Félix MESGUICH, *Tours de manivelle, Souvenirs d'un chasseur d'images*, Paris, Grasset, 1933.
 Oct : Agah OZGUC, *A Chronological History of the Turkish Cinema 1914-88*, Istanbul, Ministry of Culture

- and Tourisme, 1988.
- Ots : Agah OZGUC, *Türk Sinemasında İlk'ler*, Istanbul, Yayinlari, 1990.
- Ra : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Auguste et Louis Lumière, les 1000 premiers films*, Paris, Philippe Sers Editeur, 1990.
- Rc : Jacques RITTAUD-HUTINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumière et leurs opérateurs*, Seyssel, Champ Vallon, 1985.
- Shg : Georges SADOUL, *Histoire générale du cinéma*, Paris, Denol, 1973. tome I.
- Slm : Georges SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, Lherminier, 1985.
- Sts : Giovanni SCOGNAMILLO, *Türk Sinema Tarihi, Birinci Cilt, 1896-1956*, Istanbul, Metis, 1987.
- サセ : ジョルジュ・サドウル著, 村山匡一郎ほか訳『世界映画全史』国書刊行会, 1993年。第2巻, 第3巻。
- (1) Pierre LOTI, *Constantinople, fin de siècle*, Paris, Editions Complexe, 1991. p. 67.
- (2) 坂本勉, 鈴木董編『イスラーム復興はなるか——新書 イスラームの世界史3』講談社, 1993年。pp. 20-25, 31-34。
永田雄三, 加賀谷寛, 勝藤猛著『中東現代史 I——トルコ, イラン, アフガニスタン』山川出版社, 1982年。pp. 71-72, 77-80。
- (3) 坂本勉ほか, 前掲, pp. 34-43。
永田雄三ほか, 前掲, pp. 82-89, 95-97。
Michael NEUMANN-ADRIAN et al., *Istanbul*, München, Bücher, 1986. p. 106.
- (4) *Shg*, tome I, p. 413.
- (5) Burcak EVREN, Les premiers pas (1895-1823). dans *Bet*, p. 63.
- (6) 映写技師プロミオの旅程について綿密に考証した研究者セガン＝ヴェルガラは, 種々の文献に矛盾撞着が存することを指摘しつつ, 彼のトルコ滞在は1897年の2月から3月までであったと確言する。
Jean Claude SEGUIN-VERGARA, La légende Promio (1868-1926). dans *1895, Association française de recherche sur l'histoire du cinéma*, No.11. (décembre 1991). pp. 96-98.
- (7) Alexandre PROMIO, Carnet de route. dans *Ch.* pp. 196-197.
- (8) *Slm*, p. 132. *Ra*, pp. 176, 174-176。
なお, 同じカタログには当時オスマン帝国の領土であったヤファ, エルサレム, ベツレヘム, ベイルート, ダマスカスの映像が, プロミオの作品として合計19本記載されている。また, 最近発売されたCD-ROM『リュミエール映画』には, これらの作品のスチール写真と解説が収められている。
(CD-ROM: Michel AGNOLA et al., *Le Cinéma Lumière, made in France by PDO.*) なお, 映画誕生100年を慶賀した1995年, フランスでは国営テレビ Antenne II によってリュミエール映画が毎日1本ずつ放映された。下記のLDはそれら365作品を集成したものであり, ここにはプロミオ製作の『ボスポラス両岸のパノラマ』や『[ベイルートの] カノン広場』も収録された。
LD: *Les Films Lumière.* (4枚組, 日本コロムビア, 1996年。)
- (9) 永田雄三ほか, 前掲, pp. 90-94, 98-99,
- (10) EVREN, *op. cit.*, p. 64.
- (11) EVREN, *op. cit.*, p. 64.
- (12) *Shg*, tome I, pp. 325-330. tome II, pp. 68-69. サセ, 第2巻, pp. 149-154. 第3巻, pp. 93-97. *Mt*, pp. 26-34.
- (13) *Mt*, pp. 35-36.
- (14) *Mt*, pp. 39-46.
- (15) *Mt*, pp. 46-47.
- (16) *Mt*, pp. 47-49.
- (17) *Mt*, pp. 49-51.
- (18) *Mt*, p. 38.
- (19) *Mt*, p. 51.
- (20) 坂本勉ほか, 前掲, pp. 55-56。
永田雄三ほか, 前掲, pp. 98-100.
- (21) EVREN, *op. cit.*, p. 64.
- (22) *Archives du Bureau Premier ministre, Hususi Idare*, 95-21, C. A. 1326. cité dans EVREN, *op. cit.*, p. 64.
- (23) *Sts*, pp. 12-13. EVREN, *op. cit.*, p. 64.
- (24) *Ots*, p. 11.
- (25) EVREN, *op. cit.*, pp. 64-65.
- (26) EVREN, *op. cit.*, p. 65.
- (27) EVREN, *op. cit.*, p. 65.
- (28) EVREN, *op. cit.*, p. 66.
- (29) Michel DEMOPOULOS, *Le Cinéma grec*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1995. p. 35。
因みに1995年のカンヌ映画祭で審査員特別大賞に輝いた『ユリシーズの瞳』では, 1905年マキナス兄弟によって撮影された幻の映画を尋ねて, 主人公がバルカン諸国で長い旅を続ける。監督と脚本を担当したテオ・アングロプロスはこの大作の冒頭を下記のような場面で始める。
「モノクロで無声の映像が映し出され, 映写機の回転音が響く。マナキス兄弟が1905年に, 北ギリシャの寒村で撮った〈糸を紡ぐ女たち〉。家の前で糸を紡ぐ老若入り混じった, 10人ほどの女たちの映像にAの声がかぶさる。
Aの声(オフ, 以下, 断りのないセリフは英語)『ギリシャ。1905年。マナキス兄弟が最初に撮った映画。ギリシャとバルカン半島で最初の映画。それは事実か?これが最初の映画か?最初の“眼(まなざし)”か?』(『シナリオ採録』パンフレット『ユリシーズの瞳』フランス映画社, 1996年。p. 30)
- (30) EVREN, *op. cit.*, p. 66.
- (31) 坂本勉ほか, 前掲, pp. 55-63。
永田雄三ほか, 前掲, pp. 99-105.
- (32) EVREN, *op. cit.*, pp. 62, 66. *Sts*, p. 21。
たとえばアガーエズギツ著『トルコ映画年代史 1914-88』における該当部分を参照されたい。
「1914年。さまざまな都市で1908年からさらに多くの映画館が開設される。それらの所有者はほとんどが外国人か小企業である。トルコ映画史が実際に始まるのは, 1914年11月14日であり, この日に陸軍士官フアト・ウズクナイが長さ150メートルのドキュメンタリーを撮影した。これがトルコ最初のフィルムと考えられる。」(*Oct*, p. 5.)
- (33) EVREN, *op. cit.*, pp. 66-67.
- (34) 永田雄三ほか, 前掲, pp. 113-160。
大島直政著『遠くて近い国トルコ』中央公論社, 1968年。pp. 126-156。
EVREN, *op. cit.*, pp. 68-69.
- (35) Giovanini SCOGNAMILLO, Muhsin Ertugrul, période des gens de théâtre (1923-1974). dans *Bet*, *op. cit.*, pp. 71-72.

- (36) SCOGNAMILLO, Muhsin Ertugrul, pp. 71, 74. Cinéma, culture et société. *Bet*, pp. 44-45.
- (37) SCOGNAMILLO, Muhsin Ertugrul, pp. 74-76. *Bet*, pp. 10-12. (41) Fetay SOYKAN, Les femmes devant et derrière la caméra. dan *Bet*, pp. 205-206.
- (38) Fatin OZGUVEN, Quelques actrices du cinéma de Yesilçam. dan *Bet*, pp. 183, 188. (平成9年8月1日受理)
- (39) OZGUVEN, *op. cit.*, p. 183.
- (40) 永田雄三ほか, 前掲。pp. 172-173.



【左の図版】『ボスポラス海峡のパノラマ』ヴェネチアで史上初の移動式カメラを試みたプロミオは、イスタンブールでも航行する舟の上から景観を撮影した。出典：CD-ROM, Michel AGNOLA et al., *Le Cinéma Lumière*, made in France by PDO.

【右の図版】1900年トルコ新市街ペラの風情ある坂道ユクセクカラム通り。左上方にガラタサライの塔が見える。ここに店舗を構えたワインベルクはガラタサライの近くでシネマトグラフ初公開を行なった。出典：Michael NEUMANN-ADRIAN et al., *Istanbul*, München, Bucher, 1986. p.37.

【下の図版】シネマトグラフのトルコ初公開をトルコ語とフランス語で併記したポスター。会場は1897年ガラタサライの真向スボック亭であった。出典：Agah OZGUC, *Türk Sinemasında İlk'ler*, Istanbul, Yayinlari, 1990. p.11.

يك اونفنه غلط سرابي نارسه سه ايبريك صالونه
 استانبولده برنجي دغه اولهوق بارس وبتون اوروبلك مظهر قندري
 اولمش اولان جانل فلوغراف ليايان مراشتام اجرا اولتور .

SALLE SPONECK
 Vis-à-vis de Galata Serai,
 PREMIER ETAGE
PHOTOGRAPHIE VIVANTE
 REPRÉSENTATIONS ANIMÉES
 DE
 GRANDEUR NATURELLE

Spectacle merveilleux et saisissant,
 qui a fait courir tout Paris.
 Visible pour la première fois à Constantinople
 REPRESENTATION TOUTS LES SOIRS
 à 5 1/2, 3 1/2, 2 1/2 et 1 1/2.
 Dimanches et Vendredis, matinées



*1911年マケドニアでマナキ兄弟が製作したフィルム『皇帝メフメト五世のテッサロニーキ=モナステル行幸』



*連合国による占領下で製作されたアメット・ヘヒム監督の『家庭女教師』（1919年製作）フランスを侮辱する内容との非難を受け、検閲によって公開の禁止が命じられた。



*初期トルコ映画の代表的監督の『沼沢地の娘アイゼル』（1935年製作）。この田園メロドラマ画に出演したカヒーデ・ソングはトルコ映画界最高の女優であり、後年みずからプロダクションを設立して同国最初の女性監督となった。

出典：この頁のスチール写真はすべてつぎの書物から転載した。

Mehmet BASUTCU, *Le Cinéma turc*, Paris. Centre Georges Pompidou, 1996. pp.10, 21, 69, 74.